全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

16

■第5章「命」

胸中に新会社設立

吉田所長 がんで退任

「俺、会社辞めようと思うんだよ」。福島第1原発事故から3カ月近くが過ぎた6月のある日、所長の吉田昌郎(56)がそう漏らした。

少し前の5月20日、マスコミ各社が事故翌日の1号機への注水をめぐって「菅直人首相の指示で海水注入を中断」と報じ、問題は政局にまで発展した。ところが東京電力は26日になって、吉田の機転で実際には注水が継続されていた、と発表した。

官邸の意向に背いて独断で注水を続けたことへの責任を誰かが取らなければならない。吉田はそう考えていた。

吉田は最も信頼する部下であり、友人でもあった第2復旧班長の曳田史朗(56)に言った。

「辞めて会社をつくろうと思うんだ」

福島第1原発所長を退任した後、免震重要棟の緊急時対策本部を訪問してあいさつする吉田昌郎氏＝2011年12月9日

「何言ってんの、吉やん」

「まあ聞けよ」

吉田は曳田を制して話し始めた。

「俺は事故を起こして、地元をこんな状態にしてしまった。だから地元に活力が戻るように何かしなきゃならない。うちには事故で大量に被ばくした連中がいるだろ。彼らが持っている原子力とか放射線の知識を生かせるんじゃないか」

吉田は事故で被ばくした社員や協力企業の作業員を集めて会社を興し、研究機関や治療施設にノウハウを伝えていこうと考えているのだという。

どこまで本気で言っているのかー。吉田は会社名まで考えていた。

「『じゃあね』っていうんだ。JANEと書いて『じゃあね』」

ジャパン・アソシエート・オブ・ニュークリア・エスケーパーズの略なのだという。「原発から抜け出した仲間たち」といったところだろうか。

「吉やんらしいな」

曳田は笑った。結局、吉田は辞めなかったが、虚偽報告をしたとして社長の清水正孝(66)から口頭注意を受けた。

その吉田が事故から約8カ月後に突然、対策本部を離れた。11月14日に受けた健康診断で食道がんが見つかったのだ。

12月1日付で所長を退任した吉田は治療の合間を縫って9日に対策本部を訪れた。防護服姿でマイクを持つと、吉田は柔和な表情で話し始めた。

「食道にがんが見つかり、抗がん剤治療を受けています。被ばく線量は約80ミリシーベルトで、因果関係はありません。むしろたばこの吸いすぎが原因だと思っています。免震棟を禁煙にしたらいいんじゃないかと」

事故対応時の吉田は免震棟1階の喫煙室をよく使っていた。

「来年の4月には復帰したいと思っています」。そう意気込みを語ると、吉田らしい言葉で話を結んだ。

「これからますます寒くなります。皆さん、そしてご家族が風邪などひかぬよう、体に気を付けてください」

多くの者にとって、これが吉田の最後の言葉となった。（敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　高橋秀樹）